

Blue Moon ブルー・ムーン Bob Kindred Quartet ボブ・キンドレッド・カルテット

- ドゥ・ナツシン・ティル・ユー・ヒア・フロム・ミー****Do Nothin' Till You Hear From Me** 〈D. Ellington〉(5：55)
- イン・ア・センチメンタル・ムード****In A Sentimental Mood** 〈D. Ellington〉(5：14)
- クレイジー・ヒー・コールズ・ミー****Crazy He Calls Me** 〈C. Sigman〉(6：01)
- ムーン・アンド・サンド****Moon And Sand** 〈A. Wilder〉(7：07)
- ボディ・アンド・ソウル****Body And Soul** 〈J. Green〉(6：16)
- 過ぎし夏の想い出****The Things We Did Last Summer** 〈J. Styne〉(6：18)
- イフ・ユー・クッド・シー・ミー・ナウ****If You Could See Me Now** 〈T. Dameron〉(8：18)
- タイム・オン・マイ・ハンズ****Time On My Hands** 〈W. Youmans〉(6：13)
- ブルー・ムーン****Blue Moon** 〈R. Rodgers〉(7：25)
- ウォーム・ヴァレー****Warm Valley** 〈D. Ellington〉(5：29)
- ウィズ・ザ・ウィンド・アンド・レイン・イン・ユア・ヘア****With The Wind And Rain In Your Hair** 〈J. Lawrence〉(5：49)

ボブ・キンドレッド Bob Kindred (tenor sax)**ジョン・ディ・マルティネー** John Di Martino (piano)**ジョージ・ムラツ** George Mraz (bass)**ベン・ライリー** Ben Riley (drums)

録音：2004年2月26、27日
アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

© © 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.**Recorded at Avatar Studio in New York on February 26 and 27, 2004.**
Engineered by David Darlington.**Technical Coordinator by Derek Kwan.**
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.**Cover Photo：© Irina Ionesco / G. I. P. Tokyo.**
Photos by John Abbott.**Designed by Tabz.**

されている同曲のベスト・パフォーマンスのひとつに挙げられるものだろう。<ボディ・アンド・ソウル>も、まさにテナー・サクスのためにあるような曲である。1939年にコールマン・ホーキンスが、テナー・バラードのお手本のような名演を録音して以来、多くのプレイヤーたちがホーキンスをバイブルとして、この曲にチャレンジしてきた。これはまさにホーキンスをほうふつさせる演奏で、出だしの一音からキンドレッドの楽器の音色の暖かさ、表現の深さに感嘆させられる。アルバムタイトル曲になっている「ブルー・ムーン」での、強靱なムラーツのベースのイントロに導かれて現れるキンドレッドの、太く逞しいトーンを生かした堂々たる吹きっぷり！ 随所にアグレッシブなフレンジングもぞかせながら、まさに貫禄たっぷりにメロディーを歌いあげている。リチャード・ロジャース-ロジャース・ハートの手になるロマンティックな名ミュージカル曲が、ひとまわりスケール・アップしたような印象をうける。

アレック・ワイルダーのベンになる<ムーン・アンド・サンド>は、ボサ・ノバ・タッチの演奏で、軽快なリズムの上を、ほどよい濃厚感をもったキンドレッドのテナー・ソロが美しく流れてゆく。面白いのはタッド・ゲムロンによって書かれた<イフ・ユー・クッド・シー・ミー・ナウ>もボサ・ノバ・ビートで料理していることで、ピ・パップ期の不世出のピアニストの名作が、ぐっと軽やかなリズムとともにダンサブルな楽しさをもって聴こえてくる。ほかのスタンダード曲でも、原曲のもつ美しさを生かしながら、たっぷりメロディーが歌い繰られている。唯一といってもよい珍しいナンバーが<ウィズ・ザ・ウィンド・アンド・レイン・イン・ユア・ヘア>で、ジャック・ローレンスとクララ・エドワーズによって書かれたポップ曲。パット・ブーンなどが歌っていたシンプルなメロディーを、キンドレッドが心地よくスイングさせてゆく。そのおおらかな表情が、いつまでも強い印象をのこしている。

岡崎 正通

男が一人、アメリカを旅している。カー・ラジオからテナー・サクスが聴こえた。誰だろうこのテナーは。

男は探した。こういうテナーをオレは聴きたいんだ。現存する人であってくれ。探し当てた。それがボブ・キンドレッドだったのだ。

男とは、もちろんヴィーナス・レコードの原さんである。ご推察の通り。男は、いや、原さんはこういうテナー・サクスの目に目がない。現在好んで聴いているのがこの手のテナーマンである。では以前はどういう人が好きだったのか。ジョン・コルトレーンやアーチャー・シェップ、ファラオ・サンダースといった、そういう人たちである。

ところで、ボブ・キンドレッドは彼ら以前のテナー・サクス奏者、ベン・ウエブスターやコールマン・ホーキンスといった人たちと同期のテナーだ。

私のような大昔からのジャズ・ファンはとりあえず、ウエブスターやホーキンスからジャズに入って、その後コルトレーンなどを聴き、挫折しずなり上がったりの人生を送った。し

かし、原さんはいきなりコルトレーンやシェップからジャズに入ってしまったのだ。だから逆にボブ・キンドレッドのような人が「新しく」聴こえたり、新鮮に魅力的に響くのである。私はこういう逆転現象を濃く面白い、と思う。

それはともかく、ボブ・キンドレッドにめぐたく会見できた原さんは、さっそくレコーディングの話を持ちかけた。快諾するキンドレッド。

彼、非常にうれしかったと思う。うれしさが音楽にそっくり乗り移っているのがわかるのだ。このCDは彼の「うれしい一枚」なのである。

ボブ・キンドレッドのCDというと、1994年にMilanというレーベルから出た『Hidden Treasures』がある。クラーク・テリー（Tp）ヤグラディ・ティト（Dr）と共演したもので、たまたま私はそれを持ってよく聴いているが、これ以降の作品にはお目にかかっていない。発売されているにしても、そんなに多くの数ではないことは容易に想像できる。『Hidden Treasures』つまり「隠れた宝物」というくらいで、極めてマイナーな存在の人だ。

そういう人にまあなんと日本人がレコードを作りませんが、と言ってきたのだから驚き、かつ、これを喜ばずにはならないを喜ぼう。しつこいが、そういう喜びが彼のこの音楽を熱く輝かしたいものになっているのだ。

実際「隠れた宝物」でもキンドレッドは「ボディ・アンド・ソウル」を演奏しているが、本作のそれと全然ニュアンスが違う。こっちのほうがストレートにバカーンと飛び出していく。情熱的で、さらに吹き方がねっとりしていてコクがある。体内から間違ってなく出ていきますよ、という感じなのだ。それも、たとえば晩年のスタン・ゲッツが見せた、あの腫たを飛び出させるようなある種痛々しい出し方ではなく、こんなに吹けちゃっていいのかしらと自ら感心するくらいの吹奏ぶり。エミを浮かべるキンドレッドの顔が見えるような塩梅である。

テナー・サクスの吹きはみんなこんなふううに吹きたいのである。歌わせたいのである。そんなことを確信させる演奏だ。歌心がないから、コルトレーンやマイケル・ブレッカーのようにメカニカルな道を進まざるを得ない、という私の発想は100%間違っているだろうか。

ボブ・キンドレッドがなぜ今まで隠れたままの存在だったのか、それはコルトレーンやマイケル・ブレッカーのように「メカニカルな新しさ」を追求しなかったからである。マスコミは新しさに弱い。新しければそれが心が打とうが打つまいが、ニュースとしてとり上げてしまう。ボブ・キンドレッドでは、どんなにリスナーの心を打とうがとり上げようがない。在来型だからである。

テナー・サクスの歴史は、在来型と新幹線型の二つに分けられるというのが私の意見だ。新幹線のほうが分がいいのは皆さんご承知の通り。

しかし、在来型だろうがなんだろうがいいものはいいんだと言ってとり上げたのが、ヴィーナスの原さんなのである。本当は会社の人の名前を出してほめるのはあまりいいことではないが、私が原さんの名前を出したのは、こういうことがなかなか出来ることではないのに、してしまうからである。売れ行きを考えながらば時代追従、流行の波に乗るのが当然なのだ。現在のテナー・サクス界、見るも無惨に新幹線スタイルばかり。

私は在来型が好きだ。私のボブ・キンドレッドの聴き方はこうである。まず「タイム・オン・マイ・ハンズ」のボタンを押す。私は最近「タイム・オン・マイ・ハンズ」の気分である。各社から発売される新種のピアノ・トリオを聴くことが多いが、トリオの3人のからみに疲れると、ふと猛然とゆったりと歌うテナー・カルテットが聴きたくなくてくる。

ベースがブルンと鳴り、ブラッシュがサカサカと音をたて、ピアノが軽快に動き出す一瞬、そこへ悠然とキンドレッドのテナーが塊に入ってくる。いやあ、いいなあ。これがテナー・ジャズの極致だ。これ以上、テナーに望むものはあるのか。いや、決してありゃしない。極楽、ごくらく、なのである。

そういえばかつてキンドレッドのような演奏をする人がいた。先に名前を出したベン・ウエブスターである。大先輩、大名人である。しかし私は今ならボブ・キンドレッドを聴く。「今」だからである。大名演かもしれないが40年も50年前の演奏を聴いてもピンとくるものが少ない。その時代とはどんな時代だったのだ？

やはりである。9.11を経験し、イラクの脅みを知る人の演奏を耳にしたほうがピンとくる。考えていることが同じだからである。音楽にも今の考え方が現れるだろう。

さらにである。圧倒的にCDのサウンドが優秀である。サウンドが優秀ということは演奏者の内面も現れやすいということだ。内面がオーバーなほど意遣いや細かいニュアンス。そしてテナー・サクスのそのものの音。これ、ジャズ鑑賞に濃く大切なことである。テナー・サクスの鑑賞の本分は音にあり。こう高らかに宣言した人がいる。実は私なのだが、テナーは音を聴かずしてテナー鑑賞はあり得ない。スタイル聴きだけがテナー賞味ではないのである。

いつものことながら、ヴィーナス・レーベルの作るサウンドからは、それが余すところなく豊かに出てくるからうれしくなってしまふ。私がヴィーナス党なのはこういうところの原因があるのである。とにかく、こうしたテナー・マンが「大手を振って」出てきたことが喜ばしい。

本当は、ジャズ・ファンの大半はキンドレッドのようなテナーが好きなのである。なのに新幹線型ばかりが出てきてほめられるから、くさっていたところなのだ。もう幾何学模様みたいな新しいテナーを聴くのやめようとした人が何人もいる。かくいう私もその一人である。ピアノ・トリオだけ聴いていればいいや、と。

出来得ればキンドレッドの出現を境にテナー界の地図が塗り変えられることを望みたいのである。せめて対等になって欲しい。

P.S 思い出した。こういう話を原さんから聞いたのだった。

アン・フィリップス。ご存じだろうか。ルーレットから1950年代に「ボーン・トゥ・ビー・ブルー」というブルー一色に染まったブルー・ジャーナル一枚をリリースした歌手。この美人歌手が実はボブ・キンドレッドの奥さんだといわれている。

いや、驚いたなあ。世間は狭い。私はCDのライナー・ノートを書いたほど、この人のファンである。今でも歌えるのだろうか。だとしたら次回ボブ・キンドレッドの吹き込みに2、3曲でいいから、ぜひとも参加して歌って欲しいところだ。

ちなみに「ボーン・トゥ・ビー・ブルー」。これ、絶対推薦の隠れた宝一カル作品です。ぜひ聴いてください。

寺島靖国

ボブ・キンドレッドには「連れてやってきたテナー・サクスの巨人」という言葉がふさわしい。彼の新作を耳にして、こんなに素晴らしいサクスの・プレイヤーが、なぜいままでもわが国でほとんど知られてこなかったのかということと思うとともに、あらためてアメリカのジャズ・ミュージシャンの層の厚さについても痛感させられたのだった。1940年5月1日の生まれというから、すでに年令的には60代の半ばに近く、この世界でも大ベテランの部類にはいる。その豊かなキャリアを感じさせる、濃厚なテナー・サクスのトーン。たっぷりヴィブラートの効いた、情感豊かなフレンジング。深い懐をもつ、大きな表現力。どの点をとっても、ボブ・キンドレッドのプレイは一流である。アルバムに収められている演奏の、どの一曲を選んでみてもいい。その出だしの一音を耳にしただけで、ぐっと聴くものを惹きつけて離さない魅力を、彼の音楽はもっている。サブトーンを裏けた、何ともいえない音色の美しさ。その魅力的な音色の裏に秘められている、豊かな感情の表現。近年耳にした何人かのテナーマンのなかでも、ボブ・キンドレッドのサウンドの素晴らしさは群を抜いている。それだけでなく彼の吹奏スタイルは、ジャズ・テナーの伝統といったものを色濃く漂わせている。とくにバラードにおけるエモーショナルな表情や、スイング・テンポでの爽快な乗りは、往時のベン・ウエブスターをほうふつさせるものがあるが、それだけでなくキンドレッドはコールマン・ホーキンスからソニー・ロリンス、またはアーチャー・シェップにいたるジャズ・テナーの王道をゆくスタイルを消化しながら、この楽器を爽快に歌わせてみせる。興味深いのは何人かの評論家が、キンドレッドのプレイの中に、白人テナーのスタン・ゲッツからの影響を指摘している点で、たしかに彼のプレイの特徴である豊かなりリズムムをたたえたメロディー・ラインは、デリケートなゲッツのフレンジングにも相通じるものがあるのかも知れない。しかしボブ・キンドレッドは、スタン・ゲッツのようなクール・スタイルに向かうことはなく、あくまでもテナー・サクスのという楽器がもっているホットな力強さや濃厚さといったものを前面に打ち出しながら、独自のスタイルのプレイを繰り返りひろげてきた。

シカゴ郊外のランシングという街で生まれたボブ・キンドレッドは、5才のときにフィラデルフィアへ移住。そこで60年代の半ばまでを過ごした。キンドレッドの名前がポピュラーにならなかったのは、この時期にほとんどフィラデルフィアを離れることがなかったからなのかも知れない。そのあとニューヨークへ出たキンドレッドは、リチャード・グルーヴ・ホルムスやチャールス・アーランド、シャーリー・スコットといった一流のオルガム奏者と共にプレイしたあと、ウディ・ハーマンのサンダリング・ニュー・ハードをはじめとする、いくつかのビッグ・バンドのメンバーとしても演奏をおこなった。1992年には「デューク・エリントン楽団の偉大なサクスの・プレイヤーに捧げる」というコンセプトのもとに、「ベン・ウエブスターとジョニー・ホッジスへ愛を込めて」というタイトルのコンサートを開いたこともある。そのときには小編成のオーケストラとともに、ペーシスのミルト・ヒントンやレッド・ミッチェル、ドラマーのエド・シグベンなどといった一流プレイヤーたちが、キンドレッドのサポートをおこなったのだった。評論家のジョン・S・ウィルソンは、ニューヨーク・タイムズ誌で、次のように述べている。‐ジャズの世界で繰り返りひろげられてきたさまざまなことを、高いレベルで統括してみせたサクス奏者が、ボブ・キンドレッドだ。スタン・ゲッツやジェリー・マリガンの世代以降の、ロマンティシズムや音楽的なガッツ、陰影の深さ、荒々しいスイングといったものが、彼のプレイの中で交錯している。・・・」またジャズ・タイム・マガジン誌にはチャック・パーガが、このような一文を寄せている。「ボブ・キンドレッドの名前は、ベン・ウエブスターやソニー・ロリンス、スタン・ゲッツ、ジョン・コルトレーン、ズート・シムズなどと並んで、テナー・サクスのという楽器の巨人に挙げられるものだろう。」

1986年に「That Kindred Spirit」をリリースして以来、近年の「The Gentle Giants of The Tenor Sax」まで、キンドレッドが吹き込んだリーダー・アルバムも数枚をかぞえている。いづれもマイナー・レーベルからのものなので、大きな注目を集めることはなかったキンドレッドだが、近年はベテラン・シンガー、ジミー・スコットのレコーディング・セッションに参加。「オーバー・ザ・レインボウ」「パット・ビュティフル」という2枚のファンタジー盤の何曲かで見事なサポートを聴かせていることも、ここに付け加えておきたい。ともあれこの“連れてやってきたテナー・サクスの巨人”のこれからの活躍ぶりにも、大いに注目してゆきたいのである。

そんなボブ・キンドレッドをサポートしているメンバーたちの顔ぶれも素晴らしい。ピアノのジョン・ディ・マルティネーは、レイ・パレット楽団などでプレイしたあと、最近では彼のトリオ、ロマンティック・ジャズ・トリオを結成して活躍。チェコ生まれのベーシスト、ジョージ・ムラーツは、70年代のはじめにニューヨークへ移ってオスカー・ピーターソン・トリオやサド・ジョーンズ-メル・ルイス-オーケストラ、スタン・ゲッツ・バンドなどを皮切りに、多くの一流プレイヤーたちと共演を重ねてきた名手。そしてドラマーのベン・ライリーは、60年代にセロニアス・モンク・カルテットのレギュラーをつとめたこともあるベテランで、やはりジョニー・グリフィンやロン・カーター、ジム・ホールをはじめとする、モダン・ジャズのトップ・クラスのミュージシャンと演奏してきた豊富なキャリアをもっている。ライリーのような渋い味わいをもつドラマーを得たことで、キンドレッドがもっているハートフルな音楽の暖かさが、あますところなく描き出されることになっているのよも、見逃すことのできないところである。

このアルバムを制作するに当たってボブ・キンドレッドは、良く知られているスタンダード曲を中心にレパートリーを選んでいる。奇をてらった選曲よりも、こういった誰でも知っているナンバーばかりを演奏することのほうが、よほど難しい。名曲を演奏するのはとても楽しいことではあるのだが、本当の意味での個性というものがない。なんと毎月並みな演奏に終わってしまうという危険もあわせもっているからだ。まずはデューク・エリントンのナンバーが<ドゥ・ナツシン・ティル・ユー・ヒア・フロム・ミー><イン・ア・センチメンタル・ムード><ウォーム・ヴァレー>と、3曲もとりあげられていることに注目したい。これらは前述したウエブスターとホッジスへのトリビュート・コンサートでも演奏されていたもので、ふたりの巨匠のイントネーションをたくみにとり入れながらロマンティックな吹奏を繰り返りひろげてゆくキンドレッドのプレイが聴きものになっている。とくに<イン・ア・センチメンタル・ムード>の幻想的なプレイは圧巻で、ジョン・コルトレーンををはじめとする多くの名演のがこ